



横相新

山本

谷傳



門 13
號 1707
卷 3

出會六席目

菊花亭流水樓

新撰新番組英心

目錄

八十一	下司 <small>ちえ</small>	此知意	廿四	八十二	第司 <small>ちえ</small>	自擧	廿四
八十三	系 <small>ちえ</small>	櫻 <small>ちえ</small>	酒	八十六	丙 <small>ちえ</small>	葵 <small>ちえ</small>	廿四
八十七	系 <small>ちえ</small>	孔 <small>ちえ</small>	一久	孫入 <small>ちえ</small>	系 <small>ちえ</small>	系 <small>ちえ</small>	廿四
系 <small>ちえ</small>	曲連	曲連	曲連	系 <small>ちえ</small>	系 <small>ちえ</small>	系 <small>ちえ</small>	系 <small>ちえ</small>



八十九	奥取分高	音奴	九十九軸	弦	一止
九十一	天祚系	菅水	九十二	今東吉	糸鈴
九十二	親音利生	多奴	九十三	裏換板	竹洞
九十三	無と精を	幽山	九十六	何色う巻	幽山
九十七	夜の落	我留	九十八	笈指袋	若字
九十九	加茂川	湯月	百番	春	具角

巻の目録終

下司の智恵

根本達が実合ていよふ何と浪子といふものめじを
 そのでまよふいあんちうとらるあし有て浪子
 ちと建て較多の浪子を入れておるなるがまを指す持の
 びをばあらういんえんえんかまらうといふは桂入の若ら
 びよらるを止てぬが首はしと我仕中うらあつてふ
 ちをのやがましく思案がまは先磁石よて吸ひまを
 めんえんいんえん能の付おとやカノ磁石ををい
 浪子のまよふえい白け仕出てまよふれだ若の因の

縁より脱ぐととへ出て来るとありと。その隙に衣を脱
の中へ。チヨイト引込で着てこ

異日自務

叔父^{うしやう}のつむをるにグーリ余のよあんとくらの
こつとせちよあて。傍^{たづ}の今も切のほしてあ
こけで切のよはる。まよ付て女^メの切のよあせ
があらが。あつこを切のよあつ。や又切のよあ
あつ。まよ付て。あつこを切のよあせ。あ
こつとせちよあて。あつこを切のよあせ。あ



とごらきあ

くても一節^{ていぶつ}奉^{ほう}りは十支と二十支の後の内でも拂^{はら}ふが
てア二十支のみあてた九百文も遠^{ちゆう}ぶスリヤや支^しで
家内^{けいだい}が中^{ちゆう}をとり替^かへるものや

桑碗^{そうわん}酒

金^{かね}ぬ二人^{ににん}中^{ちゆう}の酒^{しゆ}は又^{また}残^{せま}三^{さん}拾^{しゆ}文^{ぶん}をらのひき人の酒^{しゆ}を
ひ二人^{ににん}の残^{せま}とひはよせり合^あふり又^{また}一人^{ひとり}奉^{ほう}り
何をせりあはけ又^{また}半^{はん}を桑^{そう}もゆせといひ。残^{せま}好^{こう}ひ中^{ちゆう}の酒^{しゆ}
清^{きよ}く又^{また}芳^{ほう}ふといふので。またの残^{せま}とひはりの酒^{しゆ}
といひ。立^た斗^と。それの酒^{しゆ}をひがめるとちがよ。ハチ

また金^{かね}ぬもれどつゝは後のに戸^と様^{やう}へん

西^{せい} 葵^{あひ}

又^{また}中^{ちゆう}の酒^{しゆ}をひして小^こ使^しをなすのうはりのまはりの
のよまを酒^{しゆ}やしてくれあまうりは。このひをせり。神^{かみ}も
は。まねあててまひ。コレ。今^{いま}の酒^{しゆ}は。使^しひ。ハヤ
ま。まねあててまひ。コレ。今^{いま}の酒^{しゆ}は。使^しひ。ハヤ
ま。まねあててまひ。コレ。今^{いま}の酒^{しゆ}は。使^しひ。ハヤ

御^ご 桑^{そう} 酒

金^{かね}ぬを。とて二人^{ににん}の酒^{しゆ}は。道^{みち}だ。とて。若^{わか}かり

くらりたりれり地

去るよきをよまより。遠かの丁世をさるとらげ被
 せり目入との呪ぐく。容来ものや。野田のこれまたを
 こふまの掃除あど。せ。内。中。か。は。な。れ。た。な。と。を
 子。お。は。む。こ。と。し。や。い。れ。被。下。見。ら。う。が。り。よ。ち。お。け
 せ。は。且。那。母。の。あ。の。て。な。を。お。い。し。し。よ。う。の。あ。い。さ。ん
 け。あ。ら。び。の。け。し。と。う。が。り。よ。の。あ。を。と。ち。さ。う
 あり。こ。も。り。れ。内。を。お。し。ら。う。の。ま。ま。い。ち。ま。ま
 け。い。ん。ご。う。直。ぐ。ま。を。と。し。わ。い。ん。の。ち。の。あ。い。さ。ん。を。ま。げ。て

な。我。中。を。う。ろ。く。ゆ。い。せ。こ。よ。お。い。わ。り。を。下。地
 ぬ。し。ぬ。教。で。是。い。く。ら。び。ら。よ。い。あ。て。も。ち。の。あ。い。さ
 ち。を。め。う。

関取み分高

角力とりを子よ持一人にしが親子連もてゆきしが。
 こふの男ニ云人より。ア。レ。六。去。来。ど。の。自。ま。た。ち。お
 ト。や。よ。い。角。力。と。り。よ。あ。る。で。ま。ま。と。ま。ま。を。使。い。使。い
 その。と。子。を。復。を。ぬ。い。で。ゆ。き。

巻 終

江戸細見の強弱を見て、社て来る中うよいて
居る男あり、うぐとあよに戸うう、病のこのあは、
おんと江戸をじめてまこつて、うぐはひくじし、
をりであらう、のとあだあやどまきさぬのおをかし
あがらぬど、壯湯しまのそんぐ中、麓河さう所の
芝居、うさじしい、又、格別あまのぶや、ま、とみで
るふ、清子のうんおん、うま、うけ、うけ、うけ、
サテ、は、京いど、うて、ま、サア、は、京い、の、け、ま、を、おん、
ハテ、え、お、念、お、ま、の、清、子、が、う、り、三、三、す、て、ま、の、う、

大神系

中居三人連、よて、今、格、ま、ら、へ、お、か、ア、う、ま、う、ん
ア、う、う、さん、の、お、ト、や、ア、レ、せん、ど、は、い、て、ん、へ、と、お、め、え、ん
う、腹、う、け、て、ト、や、る、ま、の、お、ま、の、お、ま、お、ま、お、ま、と、肉
を、え、ん、入、ま、通、ふ、彼、ま、代、車、ま、入、や、名、も、お、ま、の、腹
を、お、の、ま、も、チ、ヤ、コ、く、く、く、く、

今、東、右

其、名、將、其、茶、枕、を、右、お、は、行、ト、ウ、じ、や、た、の、お、ま、と、う、
キ、利、別、さん、お、出、サ、テ、ま、の、お、お、お、と、よ、ま、の、

入の

書



多々のはよの女のうらをてあらうらうらなぐあや
 むり入らうらはしれど、あやのあやのよせうらうら
 我水がでて、こもこもタリ、こもこもあげよあやうら
 フレ、あやあやのよやと回た、サア、あやあやのうらに
 ひ、あやあやのうらでひのこ

親せ音地利生

親子連のあやあやが、あやあやをば、あやあやのあや、あやあや
 着るる、あやあやのあやをば、あやあやのあや、あやあや
 親をして、あやあやのあやをば、あやあやのあや、あやあや

玉中山の南に親世言さぬくとおつんと

裏り中

有数盗人が山を尻切て遠入りが竹藪へ入り根もに
おしひぬあざあひさうどもぞ隣屋をいれり
おくありしてかきと短く形もくぬあざりて彼
盗人もあつてどふ見分られぬやうも
まのしやがとおきて又切ちおぶまとして
これをしてよくの舟の盃中よの尻切といふと
あつめとまうれを盗人トよハイヤまのさうおを

いざいざいぬアアアアの次でござるといふは
そふいふのちり助けさうとさふく去それい
アアア志し止ぬは阿でござりまふの盃と
阿阿で存むさふがや

毎のし終を

八公系まきさあはたてぬらおまが泥糸
おろと出い合えて泥糸を細く身ろが料
ハ公系もさるるも傳合えて出来れば二人とも
うける更隣のせりぬぬめと遠入て

さうのとておぼろが入るとおぼろがさうさうの條にて
親父松よりおぼろをいし候跡多しおぼろの
このおぼろ毎例おぼろをいし候跡多しおぼろの
ては然かくアイおぼろをいし候跡多しおぼろの
冷たの四と何程でもおぼろが知ておぼろの
の層おぼろをいし候跡多しおぼろの
なこでもおぼろをいし候跡多しおぼろの
燈の灯で看まん。イヤおぼろの灯でおぼろの
おぼろの燈をたくり。おぼろの燈をたくり。おぼろの燈をたくり。

このへ徳おぼろのどやといひ。おぼろの
ほして。おぼろをいし候跡多しおぼろの
おぼろの燈をたくり。おぼろの燈をたくり。

何まう是

親父おぼろのどやといひ。おぼろの
モウおぼろのどやといひ。おぼろの
ら双方ともおぼろのどやといひ。おぼろの
おぼろのどやといひ。おぼろの
おぼろのどやといひ。おぼろの
おぼろのどやといひ。おぼろの

おぼろのどやといひ。おぼろの

何れもさうだやまふめてはふらさうきしつておきつておびさま
 おのまもあきつておびさま。身もさうじや宿老でもあつら
 へんかたであふがびらんをきつておびさま。親父までいあふ
 このおれがきつてあつた。アおびさま。身もさうじや宿老
 親にや。おびさま。おのまのけつでぶさうりまふ。
 マアおびさま。おびさま。おのまのけつでぶさうりまふ。
 しておびさま。

夜の巻

かさんお夜があふ。お夜起し。お夜起し。お夜起し。お夜起し。

併さんであたまを。コッパリ。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。
 ておんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。
 息をあらう。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。

及指よあふ

朝の程長。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。
 さを。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。
 浪花の中。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。
 順礼を。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。おんまが。

其の巻をぬり一友人をきこむ先くよき言さくや
 茶を帝文七があらはと見お秘集しいろくのきを
 つまむぶも亦連中申す^{わか}茶を帝の侍てえあのみ教
 見せ日あよて雨はひひじかづゆふおひばるなり
 よに「その友人はゆいして是はたまぬと見集してま
 人を掃^する。おるるて若をよらづこを侍ひぬが芳
 さもいらの世にさよりハ坊ありと笑ひあぐさみてあ
 むねよ目をみくれおれた。宿りくんとをさかり^か禁を
 見おろせば^く茶^やら^ら松枝の申す^く舊^やお^ら出^るらん^こり^は是

昔ひとまき言じては向より大勢の人をくして二本の大樹
 押さすあやしくゆりやんとこのわりのまきををんぬ中村
 茶を帝文申す文七^は連中^をと^りま^ぬ人^教は^合を^て
 かみ^やま^も又^のい^らり

加茂川

回^い令^りを^て娘^む京^め都^め初^めづ^るを^まま^まい^しが^二月^余り^をて^近不^へ
 持^の以^てし^お先^まて^若き^あの^氏あ^合て^おま^え京^のあ^で名^り
 伊^はみ^やこ^とお^てら^教布^やく^て海^へ相^まら^たれ^は洗^は是^は健^と
 如^く親^ま湯^をを^ぬか^しま^ばか^んさ^さや^あで^てお^くま

立春

当春ハ浩方の梅心月ハ咲きまふこや雪も鳴るおの
外もくよの雪花会お候とぞく今こそハ禁裏の
の池庭へ春の鳴と去会まより禁裏の年の池庭まで
のまより七面白く雪にれれば移るるやとぞくくは
をくれとよの雪庭あがりれば雪とも鳴る不真の
てい公家方おき多く雪のぬくと作くまれば雪
いふやのそくお新糸りしやまの

新撰咏毒組の巻終

二年忘吟角力

是年下物撰

吐去初席

全八冊

立春新大集

常華亭君竹
後素軒榮庭

二席目

全五冊

夕涼新集

春詩軒素庭

三席目

全五冊

順會吟秋立

増会大深

四席目

全五冊

智友競出揃

筆花亭對壽

又席目

全五冊

牙撰寄評判

後老藝不定の例より雪の位付を
定め世の甲乙を授け別是初席之

全八冊

時勢話細目

必々合馬省

七席目

全五冊

時勢話大全

橋番亭執書

右同席

全八冊

安永六年

酉正月二日新板

右同席

新清書會類

あぢんけの所八百何...

高橋榮治軒

清書物所

あぢんけの所...

淡川久藏

書肆

あぢんけの所...

伏見屋嘉去清

書林

板本細工人

あぢんけの所...

板本屋傳去来

あぢんけの所...

山田屋久去来

あぢんけの所...

油部屋嘉去来

あぢんけの所...

奈良屋三去来

あぢんけの所...

垣屋平次

席

天地のひげ糸を糸は油の...

あぢんけの所...

一体禪師の州...

あぢんけの所...

穂が峰乃が...

あぢんけの所...

紫花を咲...

新しと死ともきふかハカの日くくよ
あつたよしととの聖志教く有終し
く新活乃想尚新古志多ひん
授ま身の内及めま交時の恒敷を
とくとあつたよ思りんせしうらふ

冬詩軒

千叶卯の花候

素従



七日

出會之席目

冬詩軒素従撰

夕涼新話集巻の巻

目録

- 冬頭
西 東 金井
- 代 極 大果
- 益の園 結く
- 杖の柄 無楽
- 第二
息子の寝居 流芳
- 拾はへん 扇系
- 吐の字法 粟本
- 通の枕字 集二枚

十九 櫻結の豆版 キ
 十二 田舎客 コニシ
 十二 浮川竹 里木
 十七 鬼笑ひ 瀧月
 十九 糸衣堂

十軸 天蓋箔 白桃
 十二 不審紙 位夕
 十 桶の月 管水
 十 皇子のまじり 時示
 十 妾室の物 管水
 十軸 袴の糸籠 扇束

冬の冬月縁起

西 東

あまのり自擲とる者とはほど立坂本山よりあまのり
 のよりお云母の山の頂上を走り自擲がゆふよむじ
 平秋まおつが京都を見おろしてあよんごあよんご
 時分のまよふよふんごのまよふごげあ 友達 七長
 おのちんとおまよふや サアまの河の今あめがきこ一は
 さんごあまホウ それいじが海法めよあてお母ている
 的智ぐあごごあてあまのよまきごのそえ遠のよや
 あまのり遠のよとあまのり

馬のくろびのふりや

息子の理ふ

去所の息子とまのふをぬきの骨をたかぬの骨格
て療治し肉の房り母とやんおきかたの骨をぬてか
が遠中とまのふをぬきし中じまておぼしこけ
どのおぼしこけとまのふをぬきし中じまておぼしこけ
のふいふふ

代 録

馬者といふとまのふをぬきし中じまておぼしこけ



い
し
み

一函者ありつりくへよりは双葉の病用を今よてはなまなり
かふるよりとあましのまゝをせけんくへははじりたる中よ
かんさんかん あまぐ
ま園書あまぐの伝系を記はるがひよのかみ家ひかなまにじ
けるのりはけぬ家物の中よとふいねありしてゆ日病系
よとて陰尺ろくさたあるもよ物モウとよかた物うらちき

抱きんぐえん

おとろぬ只今うへお申を下とばしつらぬぬ者ふいと
あひまも外あひま申を今よおゆり抱ぐとぬたういふよん
南よおとろゆりあはたぬものでいふあうらうサつてへん人を

中のほしいいよよなるあはたぬあるまはしおとろぬたうあひま
よにじが部屋でたおとろあひまおとろぬたうあひまの美
しんおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬた
そおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬた
ませうますまあひまぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬた
てもおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬた
あひまぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬたおとろぬた
ししてあひまぬたおとろぬた

園の園

法外は士達中もめりていりおのまじくしつちり
な目りまのせんとしておきつしをきえたるもあれ
もわらうやうつうしつり市のたなぐにありけりわ
あきりしきりあまふん家ありのつしなまらなるきし
ももそれのおほいしきしあつりあまふん家法であ
くばお目よあつ家まら

世の氣つくり

孝の百姓大坂の海つちのきりあまのきりあまをい
とてあんとる種が海つちのきりあまのきりあまをい

それをおきて彼百姓はよの世の本といふおがぶる
かたはるもきりあまのきりあまのきりあまをい
どしてはくる何があまのきりあまのきりあまをい
教でまらあまのきりあまのきりあまのきりあまをい

杖の折

非人なりきまて町く東海といひてあまのきりあまをい
かじりあまのきりあまのきりあまのきりあまをい
ひるコリヤハよよまをいひるあまのきりあまをい
まらコリヤまてあまのきりあまのきりあまをい

通ひよ林ん字

寺の小僧こぞうを腐くさ箱はこをよびてぶらぶらとけしけし後口
 よりちどみの太おたしと来りくまくまく鼻はなをかじかの
 を腐箱をかぎのぶらぶらぬぶらぶらよまののぶらぶら
 ぶらぶら小僧もうこそくこそくととおもくく付
 まるそのかぎれをせんかかか箱をゆきあけてるを
 ヤイあやうわらふらんがのを腐ぶやこれ

繁はな弦なひの之後

上町のちうきさながらんくるせわらめの人やどのやよは繁



おんちのまへたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
もあつてたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たつこのまへたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
てあまのまへたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
らんたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
さかたましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ

田舎客

去月夜、初めてせしし客も代めんを海老の
名前ありあははをよきとてあまのまへたましとてはしつ
紋もととらしく世にばはれむとて格の方のりつとてはしつ
よ大風呂敷をわけたの男二とてはしつとてはしつとてはしつ
をバの巻の中へ老人のねてゐるを縁をひきをきき
出月はだの月とてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
おてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ
たましとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつとてはしつ

見たりしめ

不審紙

どのぞおまよふるよとそんばはしこまきおな
 がめくおまらちをほちひらひのめだぶらりた
 ハテ相^{いしや}医者の女房は樂あは久^{くわん}育あ人どや是^いおま
 けまおびてんのいうぬらぶらあるとけ平を付ておいて先
 けまらぬもの一やあれをいふ書おこしよこめおたか
 あらばなんせむぐてんのいうぬらぶらおあけかを徒^たの
 ぶらぬよたのいふまよふおまおまおれおまおれおまおれ

よまあるこい一やあまの人の鼻よとりふ

浮川竹

夜^よおりの泣^なと割^わ竹と出合^{であ}珍^{めづ}がり相^あまきぬららうと
 ありおらぬ面^{おもて}わぬ書^か十^じ十^じ書^かの史^しやうたなう竹
 ても曲^{まが}編^あ文^ぶ所^{しよ}での身^みあぬの真^まはあ竹^{たけ}ぢして真^まはあぢ
 池^いサア法^ほめあこがらぬいむひくおくおひらぬおまらう書
 地^ちよあるこの竹^{たけ}コリーヤあぬりたま^{たま}樂^らのあまきと
 曲^{まが}編^あ文^ぶ所^{しよ}での身^みあぬの真^まはあぬらうとわくはれぢ

毎々あるといふはあれをまゝくぬぎよ竹ハテ板付くふ
 おもぐそのまゝのをまるる風ももあつてわ

桶の月

格旗きんきの大おあおあの月をぬきぬじと教せ方のよ下へ云
 付たれおあが格かくどもいろくみるをつたせたりへん
 けの外あまりなるが中あもを正桶おけを持つてあをさく
 け桶の中は月のうはりあるを刃て月をさくいと
 ぶひ子迷まよりの大おあおあ持め作有あきほしてああの月と
 は此も大將大とよ候まてへアあは桶おけくでしああのこと



アノお人の古書一冊はヨハシの書
 裏かたとけるの付せよといふと
 どのとみ出せし大角の客入
 揚りに出せしそれおんたもの
 ちをせぶコシハれが履き
 イヤのあてのせのておん
 江戸にあげてうののびお
 を刃てうの艾の流あき
 のらのとゆいむあうそん
 とう道だては出るの

とにじりつて

妾宅の物

妾宅の取戸に置く
 用をあひひつた
 していざあやあ
 取戸をあけ
 り
 ひんまじし

ふま

ツリヤ、初臺の下がのえまざるぞよ、ヤイこを辨ハ
 そちらくちををせ、子がぶくと、禱をくぐかにしてけ
 のうますのあいどこらいせいのあいのあくではなんのあ
 めいをきれて、又あくで溜うッしよぶくあらん
 何てぶらんあんでエおのきけらがらのよ溜とも眼
 が見ぬらんとあくいてお客とあんが、よよあるら
 一心をしと



咄と二席日々涼巻を終



